

防衛大学校本科第37期及び理工学研究科第30期学生 卒業式における学校長式辞（平成5年3月21日）

防衛大学校本科第37期及び理工学研究科第30期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、小原台生活に別れを告げることとなりました。ここに卒業式を挙げるに当たり、卒業生諸君全員に対し、心からお祝いを申し上げます。

本日、この栄えある式典に、國務御多端の折にもかかわらず御臨席を賜りました宮澤内閣総理大臣^{注(1)}、原参議院議長^{注(2)}、中山防衛庁長官^{注(3)}、小泉郵政大臣^{注(4)}をはじめ、国会議員の諸先生のほか内外多数の来賓並びに父兄の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。



第5代学校長 夏目 晴雄

388名の本科卒業生諸君、顧りみれば「昭和」から「平成」へと世界も日本も大きく変わろうとする平成元年春4月、希望と不安の交錯する中、緊張感に胸を震わせながら、ここ小原台の門をくぐって来た時の、まだあどけなさを残した諸君の表情を、つい昨日のことのよう思い出します。

あれから4年間、諸君は厳しい団体生活の中で、規律と自由の何であるかを学び、リーダーシップも身につけました。苛酷な訓練と勉学にも耐えぬきました。今や諸君の目つき顔つき、体力も見違えるほど逞しく成長しました。そして幹部自衛官としての将来への決意や覚悟も、揺るぎないものとなりました。今や胸を張って、堂々と卒業してゆく資格は、諸君のものであります。

タイ王国4名の留学生諸君に対しても、心からなる祝福を贈るもので

注(1) 宮澤喜一

注(2) 原 文兵衛

注(3) 中山利生

注(4) 小泉純一郎

あります。

さて諸君は、これから陸・海・空それぞれの幹部候補生学校において、初級幹部としての専門教育を受けるわけではありますが、諸君の幹部自衛官としての修業は、正にこれからが本番であります。プロフェッショナルとしての自衛官の道は決して平坦でもなく、バラ色でもありません。近時、国民の自衛隊に対する理解・認識が高まってきたとはいえ、いまだ十分なものとはいえません。

かつて、防衛大学校創設の父と慕われた吉田元総理^{注(1)}は、諸君の先輩に対し、次のように諭されました。

諸君は、自衛隊在職中、決して国民から感謝されることも、歓迎されることもなく、自衛隊を去ることになるかも知れない。あるいは非難と誹謗ばかりの一生かも知れない。御苦労なことだと思う。しかし、自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは、外国から攻撃されての国家存立の時や、災害派遣の時など、国民が困窮し国家が混乱に直面する時だけである。言葉をかえれば、君達が日陰者である時の方が、国民や日本が幸せなのだ。耐えて貰いたい。自衛隊の将来は君達の双肩にかかっている。しっかり頼むよ。

諸君の先輩は、この言葉に心を打たれ、自らを励まし、逆風をはねのけながら、ひそやかな誇りを胸に、報われることの少ない自衛官としての道を歩んできたのであります。

本当のプロフェッショナルは、志を高きにおきながらも、地道な努力を怠らないものであります。迷いや苦しみを外に表わさず、言い訳もせず、他人に理解されぬ戦いを、最後まで続けるのがプロフェッショナルであります。

諸君がこうした先輩たちの意志を継ぎ、幹部自衛官への道を選んだということは、平和と自由を守ることに生涯を賭けたということでありませぬ。

新しい時代は、時流にのって動く賢^{さか}しらな青年の手によってではなく、逆境の中で、祖国への献身と、国民への奉仕を内心の喜びとする愚直で、勇気ある青年の手によってもたらされるものであります。

諸君は、ここ小原台で学んだことを糧に、自信を持って、まっすぐ前を見据えて、この遠い道のりを歩んで貰いたいと思います。

次に、理工学研究科62名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。

注(1) 吉田 茂

諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識を修得すべく、頭脳の充電を図り、将来の飛躍のポテンシャルを培う貴重な勉強を積まれたのであります。今後諸君は、それぞれ新たな任務につかれるわけですが、更に研鑽精進され、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

逍遙歌の一節にあるように、4年間にわたる小原台生活は、今まさに「夢の如く」その幕を閉じようとしています。これから先、同期生同士、その友情と団結を更に深め、お互いに手を取り合い励まし合いつつ、新しい時代の防衛を築くために精進されることを、心から祈念して私の式辞を終わります。